アンダーロード

夏帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンダーロード

【Ｎコード】
Ｎ８２５３Ｖ

【作者名】
夏帆

【あらすじ】
麻薬に染まった町と人と、その人間関係を書いています。
また、それぞれの登場人物の過去には、あの男が・・・

≪再会≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください m（＿）m

≪再会≫

≪プロローグ≫

ここには光がない。人の影で作られた小さな夜の街。
煌びやかなネオンの道には、艶やかな蝶にも負けないぐらいの、着飾った女たちがいる。
彼女たちの鱗紛に引き寄せられた、男たちの目は虚ろだ。
少し目線を泳がせてみると、細い路地裏の道に、死体のようなものが何体も転がっている。
「うぅ・・・おぉ・・・」
うちの一人が、気力を振り絞り、片手を持ち上げようとする。
よかった、まだ生きていた。
女は体で男を魅了し、蜜を堪能させて騙し、餌付けを行うのだ。
そう　?アレ?　で。
「一瞬にして手に入れる快楽、嫌な事も全て忘れられる・・・。」
「警察?そんなもの、あったっけ?あははは」
?アレ?に取り憑かれた人間は、心を失い、体を失い、思考を失い、最後には自分を失う。
そうと分かっていても、この街自体が、すでに呪われているのだった。

≪再会≫

時刻は0時を回っていた。
未だ煌びやかなこの街には、雨が降りそうだ。
降りだす前に目的の場所へ行こう。
知らぬ間に止っていた足を出し、暗い細道を歩き始める。

コツ、コツ、コツ…
やはりブランド物の革靴は、安物とは音が違う。
コツ、コツ、コツ…ン…
違和感は感じなかった。
長旅で疲れているせいか、聴覚が少し鈍ってしまったのか、と。
コツ、コツ、コツ…ン…
いや。　しかし、おかしい。
誰かに尾行されている。
この辺りなら、殺人、強奪、レイプ等を目的とした、尾行や追跡なら数多ある。
コツ、コ…ン、カン…
この甲高い音はヒールで間違いないだろう。
次の角で振り切れるかが勝敗の決め手か。
コツ、カン、コツ、カン、カン…
さっきまで私のリズムに重ねて歩いていたのに、ヒールの音のリズムが明らかにずれだした。
感づかれたか。
角に差し掛かると、その瞬間に私は意を決して走り出した。
男である私に、ヒールでは追いつけないだろう。
角を曲がった時、突然目の前が真っ暗になり、目眩を覚えた。
「待て。」
ぼけた視界には、クマのような巨体が立ちはだかっていた。
さっきの衝突と暗さのせいで、相手の顔は見えにくい。
「待っていたぞ。例のものは手に入れたんだろうな？」
　低い声が耳に入って来る。
私には彼の言っている意味が分からない。
視界が慣れてくると、彼の姿もはっきりし、そして、その言葉が私に向けられたものではない事も分かった。
カン、カン、カン…
しまった。後ろには・・・！

「大きな声出さないでよね。私達、良い大人なんだから・・・。」
色っぽい声と甘い香りが、近い所からした。
女の息が耳にかかっていて、時々意識が遠くなり、つい息が荒くなってしまう。
「お、お前らは・・・？」
やっとのことで上げた声だが、のどが渇いていたので上手く言葉にならなかった。
「例の？アレ？欲しいんでしょ～？」
遠のいていた意識が一気に戻り、その場を逃げようともがいたが、首に冷たいものが当たっているのに気付き、抵抗を止めた。
なさけないながら、後ろから抱きつくような形で女にナイフを突き付けられ、前には大柄の男が腕組をして立ちはだかっている。
「抵抗したって無駄だぜ？」
男がニヤッといやらしく白い歯を見せた。
「ねえ、女の体って興味あるでしょ～？」
後ろから女の手が私の体を走り回る。
「欲しいと思わない？」
女は私の耳を噛んだ。
「いっ」
思わず声が漏れてしまい、体の方も硬くなってしまう。
もう、ダメだ。
このままでは殺されてしまう。
「誰だ！！！」
いきなり男が大きな声を上げた。
よかった、誰か来た。
女の手が少し緩んだ。
よし、今だ！
と、私が逃げようとする前に、女が後ろに飛ばされた。
振り返ってみると、目にも止まらぬ速さで何かが起きた後だった。
女の頭から黒いものが流れている。

「まったく、女は怖えよな」
視線を戻すと、男には見覚えがあった。
「よお、久しぶりだな。なんだい、なんだい、忘れちまったってか？この恩知らずが。」
この巨体、大きな目、大きな口、白い歯、この口調、こいつは・・・
「シゲか。久しぶりだな」
「思い出すのに時間の掛かり過ぎだ。もうボケちまったのかい？」
「あぁ、そうかもしれないな。もう8年もなるか。」
シゲとの連絡を絶ってからもう8年。
私もシゲもいい大人になってしまったな。
「頭は年寄りになっちまっても、体は思春期のままかい？あんな声出しちまって。」
私はつい顔が熱くなってしまった。
楽しい会話はここまでだ。
嬉しい再会とはいえ、何故シゲがここにいる？
シゲは警察官として？アレ？を取り締まっていた。
そして？アレ？に呑まれた政府は、とうとうシゲを無期懲役にした。
これが警察官の最後だった。
そんなシゲがここにいると言う事は、・・・
「脱獄したのか？」
「おうよ。」
シゲは何故か誇らしげに腕を組み、顎を突き出してきた。
呆れた。
「シゲ・・・」
「シー。ここでは話を聞かれる。事務所に行くぞ。」
言葉を遮るようにシゲが私を連れて早足に歩き出した。
私はされるがままついて行くしかなかった。

≪再会≫（後書き）

いかがでしたでしょうか。
こうやって公に後悔するのは初めてで、ドキドキしています。
今後とも、よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

≪秘密組織≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

≪秘密組織≫

≪秘密組織≫

ここに来るまでの道筋は覚えていない。
路地裏を右へ左へ。屋根を上ってみたり、地下道を使ったり。
まるで、猫になったみたいだった。
「ここが、我ら秘密組織のアジトの入口だ。」
誇らしげにドアを開けるシゲには、聞きたい事が山ほどあった。
8年前、最後の警察官だったシゲが無期懲役の刑になり、いつのまにか脱獄を成し遂げていたのだ。
しかも、再会の場面がめちゃくちゃだ。
私に敵だと思わせ、あの女にも味方だと思わせる・・・
最初に私を裏切り、女との信頼を築く。
それから、女のすきを付いて私を守る。
昔から変わらない。
シゲは協力プレイの出来ない奴だった。
私までも騙されてしまったのは、この8年もの離別が鍵だったのかもしれない。
「ぼさっとしてないで早く入れ。」
「あ、ああ」

ドアの奥は地下へ向かう長い廊下になっていた。
カビ臭い、湿気がムンムンする。
最初は暗くてよく見えなかったが、目が慣れてくると、見てはいけないような物がずらりと転がっていた。
バズーカとか、古い巻物とか———死体とか。
「なあ、シゲ。秘密組織って何なんだ？」
外は雨が降っている。

そのせいか元々なのか、足元には幾つも水溜りがあり、泥でぬかるんでいる。
「そんなもんは後だ。」
少しご機嫌斜めらしい。
やや低い声で私に言い放った。
ずっと奥まで進むと、頑丈な鉄扉に突き当たった。
重い扉を開けると、暗いが灯りの付いたスペースが広がっていた。
さっきの廊下までの湿った空気はなく、比較的生活しやすい空間だ。
段ボールいっぱいに入っているカップラーメンや、ワイヤーに引っかけられたTシャツ等が、どことなく生活感を醸し出している。
シゲは、この部屋のキッチンらしき所に行き、私にアイスコーヒーを用意した。
何とも言えない雰囲気に思ってしまったのが、「良い所だなぁ。」だった。
良い所？そんな訳がないに決まってる。
ここは地下だし、生臭いし、良い事なんてどこにもない。
それは、地上のえげつない光景が、そう思わせているに違いない。
「だろ？お前もここに住みたくなったかい？」
ガハハと豪快に笑うシゲは、自慢げだった。
突っ立っていた私は、シゲからアイスコーヒーを受け取り、シゲに続いてソファーに座った。
ミシミシと音がする皮のソファーから、ぶわっと埃が舞う。
静かな部屋には、同窓会の3次会のような空気が流れていた。
懐かしくて嬉しくて、騒いだりせずに、お互い思い出話や未来の話を、酒を飲みながらしみじみと話す。
この場合は、酒じゃなくてコーヒーだが。
「お前はいつ戻って来たんだい？」
シゲはコーヒーを一口飲んでから、さっそく話を切り出した。
「昨日だよ。ここは腐りきってる。」

毎日が夜の街に舞う、煌びやかに蝶たち。
それにつられる男は、徘徊するゾンビの様。
そして年々孤児が増え続ける。
全ては？アレ〃による悪循環だ。
「そうだな。で、お前はこの８年で何を見たんだい？」
事件は、もっとさかのぼる。
それはまだ、？アレ〃が流行し出した頃
まだ誰もが？アレ〃に付け込まなかった、光りのあった頃の話。

８年前、１９歳の私は、両親を亡くしてから、親父の後を継いで、探偵事務所を営んでいた。
まだ平和であったが、新聞にはいつも『倫魔』の文字が一面大きく出されていた。
『倫魔ダイエット、一週間で６キロ減！』
大きく載せられた人気女優の、ほっそりとした足は、女性誌でも話題になり、すぐに流行った。
『倫魔に脳の活性作用が見られた。』
その記事によると、とある大学教授がラット実験を行った。
不治の病のウイルスを注入したラットに、倫魔を一カ月与え続けたところ、結果驚くほどの完治と、さらにそのウイルスの免疫が付いたのだそうだ。
『これは倫魔によって脳を生き返らせ、さらに若返りも期待できる。』と、教授は説く。
この記事を呼んだ老人内でも、倫魔は大いに流行り、さらにこの頃から、倫魔の悪徳商法も増えてきた。
いろんな世代から広がってき、倫魔は見る見るうちに全てを蝕んでいった。
倫魔が流行り出したと同時に、倫魔の悪い情報も山のように入っていた。
だが、それを警察や政府は公に流さなかった。

すでに倫魔に呑まれていた警察や政府は、この？悪魔の薬〟を手放したくなかったのだ。
そんな警察の尻を叩こうとしたのは、私の親密な友人であり、仕事のパートナーでもあったシゲという男だ。
シゲは私より2歳上の警察官で、その巨体により貫禄があり、見た目よりも老いて見える。
『俺はドでかい事をするぞ。』それが彼の最後の言葉だった。
その一週間後には、シゲは音信不通になり、『倫魔批判運動！たった一人で政府に殴り込み！？』という事実が新聞に大きく載せられていた。
それから、シゲは無期懲役の刑になった、と。
次の日にシゲからの手紙が届いた。
そこには、シゲが手に入れた極秘の情報の数々が書かれていた。

私は急いでこの街を出た。
飛行機の手配をして、向かった先は遠い遠い異国の小さな町。
飛行機を降りると、鼻を付くツンとした香りがした。
ここは、すでに倫魔の餌食と化した、言わばゴーストタウンだ。
ひと気は無く、空気が悪い。
空は曇っていて光りを遮り、ずいぶん暗い。
無風の町中には生活の痕跡だけが見られた。
私はスーツのポケットの中から、シゲからの手紙を取り出して見る。

『現時点で？アレ〟に喰われた街は9もある。
その地の様子を見た。
俺は政府に？アレ〟の製造中止を訴えに行ってくる。
大丈夫だ、この事にお前は関係ない。
パートナーとして…客としてでもいいな、？アレ〟を、倫魔を止めてくれ。
このままでは何もかも無くなっちまう。』

力強く書かれた『何もかもが無くなっちまう』の意味が、今やっと理解できる。
人がいない、生活がない、光りがない、何もない。
倫魔は…？アレ〟は、全てを喰っていったのだった――

「何もなかった。」
私はその一言に、８年間で見てきた全てを託した。
シゲが静かにうなずく。
それは真っ直ぐにシゲには届いていた。
「一人でここに？」
私はこぼれるままに話した回想を戻し、現状を尋ねる。
「いや、違う。」
違う？
「そろそろ帰って来るだろうよ。」
シゲがそう言った矢先だった。
「戻ったぜ～。あんな仕事はもうごめんだね。頭がフラフラするぜ。」
キッチンの後ろの扉から、金髪の男が現れた。
耳や唇にピアスをしていて、首には重そうな金属類がジャラジャラさせている。
それからすぐに、別の扉も開いた。
今度はキッチンとは真反対の、私達が座っているソファーの後ろ辺りの青い扉だ。
「なぁに？お客さん？変な病気持って入ってないでしょうねぇ・・・。」
入ってくるなりスタイルの良いこの女は、ハエを追いやるような目で私を見た。
街の蝶と同じ形をしているが、中身が全く別のものだと、本能的に感じた。

「今、あたしに萎えたでしょ？」
「は？」
言い返そうとした時、また別の扉が開く。
「おう、すまんな。何か変化はあったかい？」
横の巨体が先に口を出した。
「ああ、どっさりとね。」
入って来た細身の男は、肩に下げた大きな袋を、音を立てて床に落とした。
黒縁の眼鏡が少し大人びて見えるが、高校生くらいだろうか。
「ねえ、ちょっと待ってよ～！」
後から入って来た女の子は、息を切らせてこの高校生にしがみ付いた。
「遅いぞ。」
「だって、暗いの怖いんだもん。お兄ちゃんが歩くの早いから。」
似通った二人は、兄弟らしい。
女の子のポニーテールがゆらゆら揺れる。
「これで今日は全員だな。」
突然立ち上がったシゲは、大きく背伸びをした。
驚いた。
こんなに？新鮮な人間〟をたくさん見たのは久しぶりだった。
「いや、まだだ。リオとアキヒロが戻ってねえぜ。」
「リオとアキヒロは西の郊外へ行ったんじゃなかったけ？」
さっきの艶やかな蝶女が言った。
郊外と言えば…あそこは？アレ〟のやり取りが少ない。
しかし街の西と言えば別である。
あそこは街中では「ヘッド」と呼ばれ、〝アレ〟の生産工場があり、もっと危険だ。
「そんなところで、何をさせているんだ！？」
思わず大きな声を出してしまった私を、周りの衆はきょとんとした。
「部外者のくせに、大口叩かないでよ。」

シンとした部屋の中に、蝶女の低い声が、重たい煙のように流れ落ちた。
静寂。
静かにシゲがソファーに座りなおした。
「俺たちは今、数年前に逃走した？アレ〟の製造社長を追っているんだ。」
「社長？」
隣のシゲは、テーブルの上の灰皿を自分の方に寄せ、ポケットから煙草を取り出した。
いつのまにかシゲは8年の間に、すっかり年を取ったみたいだ。
口から煙を吐く姿が様になっている。
「ここに居る若者はみんな訳ありなやつらでさ、ここで息潜めて生活をしているんだよ。
そいで、あっちこっち班ごとに出向いて色々と調査をしてるのさ。」
私が聞きに入ると、彼らが視界に映った。
たしかに、各々の瞳の奥には大きな闇が見える。
「そうだ、紹介がまだだったよな。」とシゲ言って、煙草を半分残したまま、灰皿に押し当てた。
一番最初にアジトに帰って来た、このチャラい男の名前は、リョウヘイ。
見た目によらず、空手道、柔道黒帯。剣道六段。弓道五段。薙刀も扱えるようだ。
シゲの不要なプチ情報によると、リョウヘイはお寺のボンボンらしい。
「今この部屋にいるのは俺も含めて6人だけど、この秘密組織には大人・子供合わせて、１０人ほどいる。いっきに覚えるのは大変だろうから、今日はリョウヘイだけにしておこう。」
反論はしなかった。
私も年のせいで、記憶力に自信がない。
「あと、もう一人…。」

眉間のシワを摘まんだ考えるポーズをとったまま、シゲは小さく独りごとを言った。
それから、「リイコ。姉さんを呼んで来てくれないかい？」と顔を上げた。
「はーい。」
さっきから眼鏡の兄にべったりしている妹が、素直に返事をして、さらに奥に続く扉の闇に消えた。
あの子は、リイコというのか…。

時計はもうすぐ6時を指す。
だが、呪われたこの街には、光りがないから朝も夜も関係ない。
ＰＭ６時から始まり、ＡＭ０時を回って、ＰＭ６時にまた帰る。
そんな世界になってしまったのだ。
氷が溶けて味気なくなったアイスコーヒーを飲み干すと、リイコが部屋に戻ってきた。
後ろには小学生前ほどの幼い女の子を連れている。
「ふあぁ…、まだ眠いのですぅ～。」
目をこすりながら登場した幼女は、迷うことなく私の座るソファーにやってきて、私の膝もとに丸まった。
まるで猫のようだ。
数秒も経たないうちに、膝もとから静かに寝息の音が聞こえた。
「この子は？」
「リイコの姉のメイコだ。」
あね？
姉！？
「リイコ…ちゃんの、ぁ姉！！？？」
私の声がひっくり返ると、周りは大袈裟に笑いだした。
なんだか私は、ここに馴染めてきたように思えて嬉しかったのだが。
一通り笑い終えると、
「だーかーらー、訳ありなんだよ。」と、蝶女がお腹を抱えながら

言った。
とてつもない訳なんだな、と思った。
私は無理やり自分を納得させたのだ。
「これから班ごとの行動を指示するぞ。準備はいいかい？」
シゲは立ち上がり、ホワイトボードを引っ張り出してきた。
かすれた水性ペンで名前と場所、内容などを書き始める。
すると、シゲの手が止まった。
「ん？どうしたんすか？」
リョウヘイがやる気なさそうに言う。
「こいつの紹介を忘れていたな。」
恥ずかしそうに頭をポリポリ掻くシゲは、私を見た。
「あ。」
「そういえば…」
「誰だ？」
「すぴー…」
口々に皆が言う。
メイコは気持ちよさそうに、愛らしい寝顔を見せているが。
「ゴホンッ」と、シゲの咳払いで静かになった。
「こいつはユキワラ君だ。昔の連れでな。仲良くしてやってくれ。」
「どうぞ、よろしく」
体を持ち上げられないので会釈すると、周りも同じく会釈した。
私はこの秘密組織の一員として、シゲの協力をする事になった。

≪手紙≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

≪手紙≫

≪心的外傷―トラウマ≫

地下の秘密組織のアジトで登場したのは、見た目はチャラいが段持ちの男、リョウヘイ。
萎える蝶女。眼鏡の高校生。その妹のリイコ、と見た目と釣り合わない、その姉のメイコ。
しかし話によると、他の二人が戻って来ていないらしい。

私達は今、少し街から外れたダウンタウンにいる。
街灯がぽつぽつと間隔を開けて続く道を、私と、メイコを抱えたリョウヘイが並んで歩いていた。
道沿いの店には皆シャッターが下りていて、不気味なほどに静まり返っている。
私達が任せられたものは、他の二人、『リオとアキヒロの確保』だ。
不安を持ちながら、西の郊外へと向かっていた。
コツコツと靴の音のほかに何も聞こえない。
時々、水溜りを踏んで、ピシャッという音がする。
私は、さっきリイコが連れてきたメイコの事を、ぼんやり考えていた。
どうしたって、見た目にはこの子の方が幼いのに、姉とはどういった事だろう…
実の姉妹では何という事か…
たしかお兄さんがいたから、この子は真ん中になるのか…
考えたってきりがない。
「姉って？」
前置きなしに尋ねてみると、リョウヘイが呆れ顔で答えた。
「今流行りの冷凍保存だろ？おっさん、時代遅れか？」

話の張本人であるメイコは、リョウヘイの腕の中でスヤスヤと寝息を立てている。
最近改造された冷凍保存というのは、姿形変わらないまま、未来に保管できるというものだ。
現在では、政府が所持していて、有能な人間を保管しているらしいが…
それに、一般人が手にするような機械ではないはず…
「詳しく聞かせてくれないか？」
「悪いな、おっさん。他人の事情は極秘だぜ？」
リョウヘイはニッと笑う。
それから、前を向き直り呟いた。
「こう見えて、口は堅いんだよ。」
その横顔があまりに真剣で、どこか寂しそうで、固唾を飲んでしまう。
やはり、このリョウヘイにも何かあるなと、確信した瞬間であった。
チラリとリョウヘイの横目に映ると、「おっといけねえ、こんな柄、似合わねえよな。」と目だけで笑った。
「口は災いのもとってこと！」
チャラくて明るい少年がそこにいた。
路地を抜けて、大きな通りに出た。
物静かで殺風景な、だだっ広いアスファルトの絨毯。
もちろん、車なんて走っていない。
大きな雑居ビルが立ち並んでいて、まるで私たちの行く道を、通せんぼしているみたいだ。
「もうヘッドに入ったのか？」
「ああ、ここからは自分の命の心配しろよ。」
ヘッドには？アレ〟の生産工場がある。
そこで生産せれる？アレ〟についての情報は極秘。
極秘の情報を守るために、雇われた人さらいや殺し屋が辺りにうろついているはずだ。

「今日はここに用事はない。こっちだ、おっさん！」
足早に先頭を切るリョウヘイに付いて行く。

　再び細い路地に入ると、身をかがめて物陰に隠れ、大通りの方を向いた。
いつのまにかメイコも目を覚ましている。
「…来ます。」
この容姿には似合わない深くこもった女の声がした。
トン、トン、トン、トン…
足音が近づいてくるのが聞こえる。
足元に影が揺れた。
トン、トン、トン、トン…
影は足音を連れて、あっさり止まりもせずに過ぎていった。
よし、行った。
私が声を出そうとした時、先にリョウヘイが息を吐く。
緊張の糸が緩み、私達は胸を撫で下ろす。
「まだです。」
メイコは私に目もやらずに言い放った。
私とリョウヘイのほどけていた緊張の糸が、絡まりながら再び張る。
とても幼いのに、すごい目力だ。
たしか、冷凍された人間は、見た目は変わらないが中身は年を取ると聞く。
「ほほう。利口な娘さんだ。そうさ、隠れたって見えるもんは見えるんだよ？」
ゆっくりと正確に話す、もったりとした口調が耳にまとわりつく。
「何だって、お前さんの親父もそうだったじゃないか。えぇ？」
どうやら、この声の持ち主に気付かれたらしい。
親父…
私はリョウヘイの方に目をやった。
目は大きく見開いて、口がガクガクと震えている。

リョウヘイの奥の奥の塊を、掴み出されたような反応だ。
「何も言えぬか、この腐った息子よ。では去り際に一つ、良いことを教えてやろう。」
私の目の横を汗が滴る。
どうすることも出来ないまま、私達は彼の言葉を待った。
一瞬が永遠に思えた静寂の後、もったりとした声は、さらにゆっくりと、
「口は災いのもとなんだよ。」
そして「ふふふ」と不気味な笑い声とともに、彼の足音と声は遠くなっていった。

嵐が去ったような中、荒い息をするリョウヘイを私はただ見つめていた。
大丈夫か？あれは誰だ？どういう事なんだ？聞きたい事はたくさんある。
が、しかし人の闇に入るには、それなりの覚悟がいる。
私の持ち合わせていた覚悟では、この闇はなんだか大きすぎる気がしたのだ。
「しっかりして。今は先を急ぎましょう。」
メイコは冷静にかつ正確な判断を下した。
長居なんてできない、先を急がなくては、二人の安否が先行だ。
その後も周囲に警戒しながら目指す場所に向かうが、リョウヘイの様子は何か違った。
必要以上に何かに脅えている、私はそんな風に見えていた。
そこで、ためらい気味ではあったが、やっと私の口を開く。
「彼は・・・さっきの男は、君のお父さ―――」
リョウヘイは一瞬、強い殺気を放って私を睨んだ。
だが、その目はすぐに伏せ、足元を眺める。

私達は、危険なヘッドを抜けて細い路地を進み、一軒の家に突き

当たった。
リョウヘイはあれから何も言わず、ただ先を歩いていた。
「ここに、捜査に有力な人がいるのです。」
幼いメイコの容姿に似合った可愛い声がした。
二重人格か？と、思わせるように。
「有力な人？」
リョウヘイが変哲もない家のドアを開けると、そこはすぐにエレベーターになっていた。
その錆びれた箱に入ると、ガガガと音を立てながら、エレベーターのドアが閉まり、動きだす。
そして思ったよりも早く下につくと、そこはすぐにバーになっていた。
カウンターとテーブルが二つ、紫色のライトに照らされて、なにやら不気味だ。
酒の匂いが鼻につき、息を吸うだけで酔いそうだった。
「遠い中御苦労さま。」
カウンターの中にいた女性が身を乗り出して、こちらにおふざけな会釈をする。
大きい真ん丸な目に、ぷっくりとした唇、チョコレート色の肌は異国譲りなのか・・・
見た目にはさっぱりとしたこの女性は、どこかで会っている気がする。
「あら？」
異国の女性は私に気が付くとカウンターを出て、「あらあらあら」っと近づいてくる。
右から見たり左から見たり、「ちょっと回って見せて」と言ってきたりして、
「もしかして、ユキちゃん？ユキちゃんじゃないの？」と、両手をパチンと鳴らした
このニックネームには聞き覚えがあった。

――シゲからの手紙を頼りに辿り着いた、南の小さな諸島。
あの頃、そこには、倫魔の工場が建てられようとしていた。
山に囲まれ海が窓口になっており、ひな壇のようにして、白い家々が連なって建てられている。
綺麗な島と自然と、平和な人々の暮らし。
だが、それらを裏切るようにして、ニュースや新聞には『異国で大人気！』と、倫魔の話題で持ちきりになっていた。
悪魔の手はすぐそこまで迫っていた。
「あなた、ユキワラ君よね？」
初めて来た島で、初めて声をかけてきた女性は、すでに私の事を知っていた。
「あたし、シゲっていう男を探しているのよ。」
その女性は、私がユキワラと言う人物なのかどうか確認もせずに、話を進めてくる。
「シゲは…」
シゲは無期懲役で監獄にいて、私はシゲから調査の依頼を受けている簡潔に説明を終えると、女性は意外そうな顔をした。
「おかしいわね…」と言って、ポーチバックから手紙を取り出し、私の前にかざして見せた。
「この手紙、一昨日家に届いたんだけど。あたし宛で、シゲっていう人から。」
「見せてくれ。」と頼んでも、見せてはくれなかった。
だが、大まかな内容を女性は話す。
「大親友のユキワラという男が、明後日空港にやって来る。彼の調査の手伝いをしてくれ。」と。
それから「調査って何の？」と付け足した。
「？アレ？について。」
私は声を小さくして話す。
「？アレ？って？」

女性は大袈裟に大声を上げた。
私やシゲは、倫魔の恐ろしさを知っているから、軽くその名前を口にしないのだ。
少し口をモゴモゴさせながら、躊躇いがちに私は言った。
「倫魔の。」
真剣味のない女性は、悠長に首をかしげた。――

≪手紙≫（後書き）

次話は８／２３　ａｍ７：００　公開ですｂ

≪失われた家族≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

≪失われた家族≫

「もしかして…」
「もしかしなくてもあたしよ、あたし！」
女性は自分の顔に指を指して、顔を近づけてくる。
「シャック…」
「久しぶりね～、私も調査の為にここにやって来たのよ。」
シャックは私にウインクした。
彼女の名前はシャック。
「知り合いだったですか？なんだ、それなら話が早いです！」
メイコは愛くるしい笑顔を交互に見せる。

「まあ座って」とシャックに促されて、私達は４人掛けのテーブル席に座った。
右隣にメイコ、その前にリョウヘイが座る。
「マスター、いつものヤツをです。」
「はいはい。」
『いつもの』と言うからには、シャックは察していたらしく、その物が乗ったお盆をすぐに持って来て、私の前に座った。
メイコの前にはアイスが乗ったメロンソーダが出される。
そのほか私達には、コーラが出された。
しばらくすると、本題が進められる。
「あの調査は進んでいますか？」
話を切り出したのはメイコだ。
シャックの方には目もやらずに、黙々とメロンソーダと向き合うメイコは、真剣な話をする時、どことなく大人のオーラを放つ。
「ええ、もう終わっているわ。」
そう言って、シャックは席を立ち、パソコンを持って来ると、そのパソコンは、体の内側がゾワゾワするような声を出し、画面を光ら

せた。
シャックが、ピカピカする画面を私達にも見えるように角度を付けてると、マップとその中に赤く染まった個所が見えた。
「グローバル・ポジショニング・システム、略してＧＰＳでリオとアキヒロの現在位置を調べたの。１時間もそこから動いていないってことは、安否が不安だわ。場所はここからすぐだけど、その前に厄介な奴がいるのよねぇ…」
「厄介な奴？」
一呼吸置いてから、シャックは声のトーンをうんと落として、ゆっくり丁寧に言う。
「リョウヘイのお父さん。」
私は心を打ち抜かれたようにドキリとした。
息を吸うのが苦しくなって、急に空気が重くなったようにも感じられた。
リョウヘイは青ざめた顔をわなわな震わせている。
止まったような時間の中で、ひたすらカチカチと時計が動くのが、不思議に思えるくらいだった。
「さっき会ったです。」
一社んが永遠に思えた静寂を、刀のように切り破ったこの声の持ち主、メイコは至って冷静であった。
「なら、話が早いわ。」

話が終わった後、シャックは私をカウンターに座らせた。
リョウヘイとメイコは奥の部屋で休憩を取っている。
「リョウヘイの事、話しておいた方がよさそうね、あの子は何にも話さないから。」
シャックは細い煙草に火を付け、思い耽るように一点を見つめたまま語り始める。
「あの子の母親は、あの子が幼い時に〝アレ〟に呑まれて姿を消したわ。ずっと父親と兄と3人で暮らしていたの。けど…」

ふうーっと一度、煙を吐く。
「父親は実は殺し屋だった。」
「え…」
「一人で男3人を養うのは無理があったのよ、その頃から兄は家に帰って来なくなっていた。さて、何故かしらね。」
シャックは私の目を見る。
頭で思っていても上手く言葉にならない想いを、もごもごさせていると、シャックはフフッと笑って、確信に触れた探偵のように指を立てて言う。
「父親に殺されてしまったのよ。」
「親父さんは、まさかヘッドの…」
言葉が繋がらない。
シャックは静かにうなずいた。
リョウヘイの父親は、殺し屋としてヘッドに雇われていた。
それを知った実の息子、リョウヘイの兄も生かしてはおけなかった。
「だからと言って…」
殺すなんて…
「それをついにリョウヘイも知ってしまったのよ。でもあの頃、父親はリョウヘイを殺さなかった。」
シャックの煙草は二本目に入っていた。
どうにか気を落ち着かせようとする手段である。
私は固唾を飲んで、一言一言を大事に聞き入れる。
「その代わり…」
「この事を周りに話したら、次はお前をも殺さなければいけない、と。」
言葉を繋げたのは、奥から戻ってきたメイコだった。
「だけど、素直な幼いリョウヘイは、ある日やってきた若い警察官に話してしまうのです。」
若い警察官。
私はシャックに目配せをする。

それってもしかして…
「ええ、そうよ。」
一呼吸置き、小さくなった煙草をガラスの灰皿に押し付けた。
そして声を落して、囁くように言う。
「それがシゲ。」
「シゲが・・・」
呆気にとられてしまった私は、ぼんやりとガラスの灰皿に目をやった。
気がつけば、４本も吸殻が溜まっていた。
シャックがゆっくり話し始める。
「あの日・・・」

――あの日、それはリョウヘイがまだ幼かった頃。
兄の通夜が終わって、間もない頃。
父親が仕事に出かけた後に、一人の若い警察官が尋ねてきた。
その人は、子供に訊いた。
「お父さんはどうしているの？」
子供は首を横に振って答えなかった。
「お兄さんは元気かい？」
子供は首を縦に振った。
「お父さんに喋るなと言われたのかい？」
子供は首を横に振った。
そして、次にシゲは口にする、
「君のお父さんは殺し屋で、君のお兄さんはお父さんに殺された。
それを知ってしまった君は、お父さんに脅されているんだね。『次はお前を殺す』と。君はお父さんを怨んで・・・」
「違う！！」
やっと声を上げた子供は、涙をぽろぽろ流しながら、シゲの足にしがみ付く。
「お父さんは殺し屋なんかじゃない！兄ちゃんも死んでなんかいな

い！」
たかが子供のパンチは、シゲの巨体を越えて、心に痛みを与えた。
「僕は…僕は…」
シゲはしゃがみ込み、子供と同じ目線になった。
「僕は、お父さんを怨んでいる…」
シゲの耳に届かない、消えそうな小さな声で、つぶやくように子供は言った。
「君はどうしたいんだい？」
真っ直ぐに見つめるシゲと、過呼吸と繰り返し涙が落ちる子供、一瞬の静寂。
「僕はお父さんを…」
そして、子供は言った。
決して口に出してはいけない本心。
恐怖を越えたように、どっと涙が溢れて、それ以上言葉が出ない。
その子供の心の傷に、埋め込まれた闇…
「僕は、お、お父さんを…殺したい。」
震える声は、はっきりとそう言った。
シゲは、ゆっくりと子供を抱き締め、その耳元で囁く。
「最低限必要な荷物を取っておいで。私が君を守ってあげるよ。」

≪失われた家族≫（後書き）

次話は　８／２８　ａｍ７：００　に投稿します。

頑張ります！！ｗｗ

≪安堵も束の間≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

≪安堵も束の間≫

　リョウヘイの過去を知って、私は少し気が重かった。
雨上がりの気配も水溜りも消え、外は風が少し肌寒い。
乾いた空気が気持ちいいはずなのに、それも今は窮屈に思えた。
私達がやって来たはの、リオとアキヒロの居場所、古いアパートだ。
シャックはあのバーに残り、私とリョウヘイ、それにメイコと3人で向かった。
「ここ、普通のアパートだぜ？ほんとーに居んのかよ？」
気だるそうにリョウヘイは頭をポリポリ掻いて、アパートを見上げながら言う。
街灯も比較的明るい道にある、2階建て、横に3部屋のアパートだ。
二階右と、一階真ん中の電気だけが付いていることから、どうやらまだ人が住んでいるらしい。
「中に入るぞ！」
　リョウヘイを先頭に、私はメイコを抱えて階段を上った。
シャックによると、２０１号室に彼らのＧＰＳ反応があったらしい。
その２０１号室は、階段を上がって一番奥にあった。
私達はそのドアに貼りつき、ここだ、とリョウヘイが指を指した。
誰かが襲いかかってきたとしても、リョウヘイが対応でき、また、どこかで見張りを張っているのであれば、メイコが気付く。
私は彼らのサポート役であり、応用能力と冷静さを重視される。
これはシゲの不得意な協力プレイだった。
懐かしい回想を振り解き、リョウヘイに頷いて返すと、リョウヘイは　２０１号室のインターホンを押した。
ピンポーンと高音がエコーし、消えていく。
誰かが出てくる気配もなく、次にドアノブに手をかけるよう、リョウヘイが私に指示した。

私は頷き、息をのんで、ゆっくりと音を立てないようにドアノブを掴んだ。
「ゆっくり」
リョウヘイが私に向けて口をパクパクする。
もう一度頷くと、リョウヘイが身構える。
メイコと私は頷いて、ゆっくりとドアノブを回した。
耳をかするようにキィィっと音を立てて、ドアが開く。
人一人入れるくらいまで開けると、リョウヘイは身構えたまま、中に入っていった。
私はリョウヘイが先に入ったのを確認してから続いて部屋に入り、ドアの方へ向き直って追手を警戒する。

部屋の中は暗く、空気がずんと重くなっていた。
外も暗かったので目が闇に慣れていて、辺りを見る事が出来る。
ドアを閉め、私達は廊下から繋がっている風呂や洗面所の捜索にかかった。
洗面台は新品同様に綺麗過ぎるほどだ。
だがその奥の風呂場には、湿ったタオルと長い髪が一本落ちていた。
「ユキちゃん！」
呼ばれて慌てて振り返ると、メイコがゴミ箱から見つけたらしい堅結びされた袋を、摘んでぶらぶらと見せている。
私は近づき、持っていたペンライトで中を透かして見てみると、
「こ・・・これは！」
「ヤバいですね・・・」
赤い宝石のようなキラキラした固形物が3粒。
これは、見掛け判断に過ぎないが、倫魔に違いない。
「うわぁ！！」
突然、先行していたリョウヘイが大声を出し、バタバタと足音を鳴らす。
エコーがかった音は私達の耳にもすぐに伝わり、メイコも私も慌て

てリョウヘイが向かったリビングへ行く。
リビングに入ると、物が少なく殺風景な空間が広がっていた。
「まさか・・・」
ソファーの前に立ち尽くすリョウヘイをすぐに見つけ、私達も駆けつけると、ソファーには顔に袋をかぶせられた人がぐったりとしていた。
私はハッと息を飲む。
メイコもこの時ばかりは、小さな悲鳴を上げた。

リョウヘイが、袋をゆっくりと丁寧に持ち上げると、綺麗な顔立ちをした男があらわになった。
「灯りを！」
リョウヘイが言うので、私がペンライトを差し出そうとすると、その前に部屋が一瞬にして明るくなった。
何年も海底にいた魚が、急に釣りあげられて初めて光を見たように、私達の目も突然過ぎて、その明るさを受け止めきれない。
「リョウヘイ？」
目が光になれる前に、初めて聞く甲高い声が聞こえた。
「ああ、俺だ。迎えに来たぜ！」
慣れ合った仲なら、声だけで人物が分かるものだ。
リョウヘイは自信気に言う。
少し遅れて私の目が慣れ、声の方を向くと、キッチンの方から２０歳前後くらいの女性が顔を出していた。
「よかった、無事だったですね！！」
メイコが張り切って声を上げると、女性はＶサインを送った。
リョウヘイの方は、「アキヒロだ！」と騒ぎ立て、頬を叩いたり耳元で名前を呼んだりして、懸命にアキヒロという男を起こそうとしている。
この部屋全体が祝福と安堵に包まれている中、私は感じていた。
さっき洗面所で見つけた”アレ”と、この部屋の微かなツンとした

香り、目を覚まさないアキヒロ、キッチンカウンターに寄りかかったまま動こうとしないこの女性・・・は、リオなのか。
私は眠っているアキヒロのもとへ近付くと、強引にリョウヘイを退かせた。
「何すんだよ！おっさん」
床に尻もち付いたリョウヘイの声に反応せず、私は確かめなくてはいけない事があった。
ペンライトを取り出し、アキヒロの口内を照らす。
「そうですね・・・」
メイコは頭が良い。
メイコは、アキヒロの手を取り、まじまじと見つめる。
私の探していた、見つけてはいけないものを、口内に見つけた。
息を深く吸ってはいけない。
彼の肺から送り出されてくる吐息には、ツンとした匂いが含まれている。

「そんな・・・」
数分後、メイコが言う。
バタンっとアキヒロの手が床に落ちる音に、私は思考を遮られ、その手を見た。
節々が黒ずんでいるのは、”アレ”に冒されている事を示す。
それに、”アレ”の赤みを帯びた喉や歯や舌、ツンとした匂い。
認めざる追えない、間違いない。
「何だって言うんだよ！まだ息はしてんだろ？」
リョウヘイはきっと、”アレ”に喰われた人間を見た事がないのだ。
全部喰われきった人間はーーアキヒロはおそらく・・・
「あと半日ってところか・・・」
リョウヘイは何も言わずに私を見つめ、メイコは床にしゃがみ込み、泣いていた。
と、そこで「バタンッ」と音がし、キッチンの方に向かうと、女性

はうつぶせに倒れていた。
彼女もアキヒロと同じように・・・いや、まだ分からない。
先入観にとらわれないように、私は思考を遮った。
一瞬にして正気を失ったこの部屋は、息をしなくなったように静かになった。
冷静さを保っていた私は、女性を担ぎ、「一刻も早く戻る、リョウヘイ、先陣を頼む。」と、リョウヘイを無理やり立たせた。
「あ、ああ。」
リョウヘイは、アキヒロ担ぎ、メイコとともに部屋を出る。
外はまた、雨が降り出していた。

≪安堵も束の間≫（後書き）

次話は、９／７までに投稿します！！

見てくださって、ありがとうございます！！

≪二つの命≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿＿）m

≪二つの命≫

薄暗いアジトに戻ると、蝶女の姿があった。
蝶女は「おかえり～」と、軽々しく手を振り、雑誌をペラペラとめくっていた。
風呂上がりらしく、濡れた髪を扇風機で乾かしている。
この場には合わないラベンダーの香りがした。
「シゲは！シゲはどこに居る！急がなきゃいけないんだ！」
私が大きな声を上げたので、奥の部屋から見知らぬ年寄りがドタドタと足音を立て、血相を変えて歩いてきた。
「なんだい！うるさいよ！！」
女か男か分からないほど短く切った髪に、ひどく濃く刻まれたシワ、色黒な肌に濁った目玉が飛び出しそうだ。
年寄りは誰にも負けないくらいの大声で叫ぶと、「うるさいのはアンタもでしょ。」と蝶女が雑誌をめくり続けながら口だけを動かして言った。
フンッと年寄りは鼻を鳴らしてから、冷たい表情で蝶女の雑誌を睨みつけた。
睨みつけたままこちらを見ると、老眼なのか険しく眉間にしわをさらに寄せ、状況が読めると目を真ん丸に見開いて、声にならない叫びを上げる。
リョウヘイの背中に乗ったアキヒロと、私の背中のリオを交互に見た。
「早く医務室へ！」
ずいぶんとせっかちな年寄りは、バタバタと部屋に走っていき、ドアの向こうで「早く来な！」と手招きをした。

医務室は一面白の清潔感がある部屋になっていた。
ナースステーションと病室が一緒になったような作りで、医療道具

は必要以上に揃えてあり、その隣には大きなベットが二つ並べてある。
リョウヘイがアキヒロをそのベットに下ろそうとすると、年寄りはリョウヘイをキッと睨んで、
「早く来なよ！」と、さらに強く怒鳴った。
年寄りは、医務室の奥の壁にある、南京錠付きのドアの前に立っていた。
壁と同色の飾り気のない真っ白なドアなので、金色の南京錠が無いと見つけられそうもない。
落ちてきそうなリオを背負いなおしてドアの方へ歩くと、後ろでリョウヘイの舌打ちが聞こえた。
年寄りは南京錠を開け、中に入ると、太い真っ白な廊下があり、両サイドに幾つも同じ形のドアが続いていた。
それぞれのドアはさっきのものと変わりなかったが、小さな窓が目線辺りに付けられていた。
年寄りは、入ってから左側三番目のドアの前で立ち止まり、一瞬こちらを向いて私達を睨んだ。
年寄りは首にかけていた鍵になる特別なカードを取り出すと、ドアノブの下に差し込む。
ビジネスホテルみたいだと私は思う。
ピッと合図の後にガチャンと扉が開き、年寄りがドアを開けたまま
「その女はここに寝かせな！」と、だけ言って年寄りは次の部屋へ向かった。
「・・・・」
「その男はこっちに運びな！早くしなよ！！」
私がリオを部屋に入れるのをぼんやりと眺めていたリョウヘイに、年寄りは容赦なくどなり声を上げる。
相当頭に来るとは言え、リョウヘイは年寄りの言われるままについて行った。
きっとこの手の男は、口うるさい年寄りは嫌いなはずだ。

リオを寝かせると、この部屋を見回してみる。
この部屋にはベッドしかなく、あまりにも殺風景だった。
目を覚ます様子もないリオを静かに寝かすと、私はリョウヘイ達がいる部屋に向かう。
ふとこの部屋のドアを見ると、さっきは光の反射具合で気が付かなかったが、「１０３」と凹凸が付けられていた。
廊下に出るとすぐ、向かい側左のドアが開いているのに気付いた。
ドアには「１０６」と凹凸がされている。
そこへ足を運ばせると、次第に話声が聞こえてきた。
その声はとても低く、さっきのせっかちな年寄りには似合わない、心配そうな声だ。
「・・・危険なんだよ・・・そうとも知らずに近寄り過ぎると、お前も同じ目に合うかもしれない。あたしはあんたを心配して・・・」
「・・・俺の事はもう、ほっといてくれよ。」
「お前が死んじまったら、あたしはどんな顔すれば良いんだい。」
年寄りは声が裏返るほどに泣きそうな声を上げた。
しばらくの沈黙の後、「知らねえよ。」とリョウヘイは言い、さらに沈黙が続いた。
リョウヘイが部屋を出ようとすると、扉の手前の私に気付いて、「余計なこと・・・話すんじゃねえ。」と、聞こえるか聞こえないかの低い声で言った。
リョウヘイの足音が遠ざかり、遠くの方でガチャリとドアの開く音がした。
「まあ、そんなとこに突っ立ってないで、お入りよ。」
頷くと、私は部屋に入る。
この部屋もリオの部屋のように真っ白で殺風景な部屋だった。
ただ、さっきの部屋よりもずいぶんと狭く、アキヒロが横たわるベッドが窮屈そうに中央にある。
「お前さんは、たしかユキワラだね。昔からよく知っているよ・・・」

先に話し始めたこの年寄りは、名乗る前に私の事を知っていると口に出した。
私には初めて会う人なのだが。
「あなたは？」
「あたしは、ルウラだよ。こう見えてね、とある大学の教授・・・だったのさ。まぁ過去の話になるけどね。」
年寄り――ルウラは、そう言うと、小さくため息を吐く。
「あの子は、私の孫でね。」
あの子とはリョウヘイの事だろう、ラウルはリョウヘイが出ていったドアの方を見ながら言う。
それから、ため息交じりで笑いながら、「まぁ初めて会ったのは、ここでなんだけどね。」と付け足した。
ラウルは天井を見つめると、目を閉じた。
その閉じた瞳には何が映っているのか知る術もないが、リョウヘイや家族、昔の景色が浮かんでいるのだろう。
「もしかして、リョウヘイのお父さんの・・・」
――生み親になるんですか？
「そうだね。そういう事になるね・・・」
私の言葉を遮ったラウルは、目を開けて天井の一点を見つめた。
少しの沈黙の後に、ふと何かを見つけたようにフッと吹き出し、次には天井に向かって突然腹を抱えて笑いだした。
「あっあっあっあっあ」というような喉から湧き出る甲高い笑い声は、絶えまなくこの部屋に響く。
「なんですか？」と私が言い返す前に、ラウルは目尻のシワに溜まった涙をぬぐって「いやいやいやいや」といったん落ち着き、今度は声を殺して「くっくっくっく」と笑い方を変えた。
私の不快な表情を確認すると、腹をヒクヒクさせたまま話し始める。
「いやぁね、何であんたには話したくなるんだろうと思ってね。よくよく考える前に、あんたはシゲさんによく似ているよ。その器の大きさと言うかねぇ・・・さすがシゲさんの・・・あれ、何だっけ

？」
一方的に話し終えたラウルは、また「あっあっあっあ」と笑いだした。
すると、そこに足音が聞こえてきて、振り返るとドアの前にシゲが立っていた。
「おい・・・」と私は言いかけると、シゲは被っていたおしゃれな帽子を脱いで「悪かったな、ちょっと野暮用でな。それより、メイコに聞いたんだが。」と言って、アキヒロを見た。
「ああ、まだ眠っているよ。」
自分でも驚くぐらいその時の声は小さくて、まるで私のものではないように思えた。
シゲはアキヒロのもとへ近付くと、その色白の肌をさする。
小さいため息を一つついてから、私を見据えると「ちょっと良いか」と、シゲは一人で部屋を出た。
私はラウルに会釈して、シゲについて部屋を出ようとすると、開けっぱなしのドアの前で戻って来たシゲにぶつかった。
「ラウルさんもここを離れた方が良い。」
シゲはラウルにそう言い聞かせると、ラウルは沈黙に時間をかけてから「もう少しだけ。」と言った。
廊下を歩きだすシゲについて行く途中で、後ろからラウルの声で「後で煙草をよこしなよ！」と響いた。
シゲが一瞬振り返って、もう死角で見えないラウルに微笑みかけた。

ロビーに戻ると蝶女は相変わらずで、帰って来た時と変わらない。
アキヒロやリオがあんな様子で帰って来たというのに、まったく興味が無いらしい。
シゲは私を革製のソファーに座らせると、初めてここに連れて来られた時と同様、アイスコーヒーを渡された。
シゲも同じものを持って向かいのソファーに重い腰を下ろした。
蝶女は空気の重さを察して、部屋を出ていこうと雑誌を閉じる。

「そのままでいい、なんとなく聞きなさい。」
シゲが優しくそう言うと、蝶女は黙って雑誌を開きなおした。
「ユキワラ君、お前は知っているとは思うが、”アレ”の中毒による依存者が出た。自主的にかどうかは知らんが、かなり体が弱っている。今は医務室の奥の部屋で監禁状態にあるが、命は長く持たないだろう。」
いつの間にか蝶女の、雑誌をめくる音が聞こえなくなっていた。
コーヒーを一気に飲み干すと、モヤモヤした気持ちがスーッと晴れていく。
静まり返ったロビーに、「そっか」と小さく蝶女の声が通る。
「リョウヘイは？」
私は不意に思うと、先に口走っていた。
シゲは首を振る。
「さっき、自分の部屋に戻ったんじゃないかな？」
蝶女が言うと、再びページをめくる音が聞こえ出した。
また静寂に戻ると、シゲは咳払いをし「この事は追々俺の方からみんなに知らせるから、お前らは他に漏らすな。混乱を招いては組織が崩れてしまうからな。分かったかい？」と、最後には、昔から変わらない口癖のような疑問形で話を縛った。
私は静かに頷くと、蝶女は「はいよ」とやる気なさげに言い放った。
「よし。」とシゲが立ち上がる。
と、「やって来てからすぐに初仕事で疲れただろう。部屋を用意しておいたから、案内しよう。」
そう言って、シゲは振り返りもせずに暗い廊下を歩いて行った。

≪二つの命≫（後書き）

ギリギリでしたっ（＜＿＞）

次話は　９／１７　までに公開します＾＾

あと、『あらすじ』を変更しましたので見てみてください～

また、感想等　受け付けています（＊＾＾）ｖ

夏帆

≪そして≫（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

≪そして≫

≪　罠　ートラップー　≫

　あれから、ヒロアキが無くなったのが昨日の事。
突然に。というよりは、やっと。という感覚で、アキヒロは死ぬまで酷く苦しむ様子も無く、ひっそりと眠り続けていた。
決まった間隔で脈をとらなければ、生死も分からなかったのだ。
眠り続けたその延長で、逝ってしまったというのが美しい響きなのだろう。
しかし悲しいことだが、死ぬことは天命のように定められていた、と言っても過言ではない。
なにしろ、大量の”アレ”が抽出されていたからだ。
一言も話していないが、私はその葬儀に泣く事が出来た。
　リオはというと、二日前に目を覚まし、今ではピンピンしている。
嬉しいことだ。だが・・・記憶消失。
リオは場所名や人名などの記憶を、丸ごと無くしていた。
この二日間で、シゲは付きっきりでリオに、自分の名前から出身までを話している。
ただ、「あの日の事件と”アレ”を含んでいたという事実は伏せておけ」とシゲは言った。
「いずれ自分で思い出す。そして・・・」と、最後には言葉を濁したが。
とくかく、リオは元気だ。
　リョウヘイは相変わらず、何だか様子がおかしい。
前より一層ツンケンして、かと思えば何やら物思いにふけっていたり・・・
何かあったのは間違いないのだが、なにしろリョウヘイは「何もねえよ、放っとけ。」と言うだけで、自分ことを何にも話してくれな

い少年だ。
それは過去の心的外傷だと周りは言うが、私にはそんなふうには見えない。
目が合えば、いや、隣に座れば、リョウヘイの口がモゴモゴする事が増えた。
何か言いたげで、言えない・・・そんな様子を、私は勝手ながら思っている。
　シゲからもらった部屋は、良い部屋になった。
初めは、弾力性を失ったベットが一つ、部屋の中にぽつんとあるだけの部屋だった。
そこに私の私物や、集めたガラクタで幾日重ねて作った家具を並べると、見事に素敵な部屋になった。
私がここに来て一週間、あの日以来仕事は回って来なかった。
それはリョウヘイも同じらしく、よくロビーで会う。
ロビーで会っては、トランプをしたり話をしたりと、悠長に遊んでいる。
それとは逆で、メイコとはあれ以来全く会っていない。
シゲに「メイコは？」と聞くと「張り込み中だ。」と、返されるのがオチで、もう聞きもしなくなった。

　あの日の事は何にも解決していない。
死人まで出たものの、何の動きも無いままだ。
「このままでいいのか？」と、言ったこともあった。
「死人まだ出たんだぞ！？」と、ムキになった事もあった。
「お前は気にすることはないよ。体を休めた方がいい・・・」
シゲは性に合わない、”言葉を濁す”を使うようになった。
ラウルが、器のでかさが似ている、と言っていた事を思い出す。
だが、今になってみれば、どこが”器のでかい男”なのか分からない。
それは昔のシゲでは考えられないような、冷静さを持ち合わせてい

るせいかもしれない。
昔のシゲなら、うんとも言わず行動に出るのだろう。
昔のシゲなら、無茶ばかりするのだろう。
昔のシゲなら・・・昔の・・・シゲ・・・！
考えているうちに、一つの仮説が構成された。
シゲはメイコとともに、リョウヘイの親父を張りこんでいるのではないか、と。
いや、まさか、メイコに張り込みを任せて、自分はリョウヘイの親父との接点を持とうとしているのか・・・
考えれば考えるほどに、頭の中がそれでいっぱいになった。
ならば、私に出来ることは・・・
と、そこにノックの音がする。
「やっほ～」
「どうぞ」と答える前に、煌びやかな女が入って来た。
蝶女こと、アヤカだ。
いつも、確信が付きそうな所で登場する人物である。
通称「アヤさん」とか「アヤ」で呼ばれており、わたしは「アヤ」と呼んでいる。
アヤは自称２３歳だが、化粧で隠された目尻のシワなどから見て、３０はいっているだろうと思う。
そんなこと、口が裂けても言えないのだが。
基本的にここにいる人たちはみんな、自分の事情については話したがらない。
が、アヤだけは違った。
アヤはいきなり部屋にやって来て、どっかりと木椅子に座ると、寝位置を確かめる猫のように、お尻をくねくねさせる。
やっと落ち着くと、「あたしはね、全部取り上げられたのよ。酷いと思うでしょ？」と、聞いてもいない話が突然に始まった。
私の怪訝な顔を見るやいなや「どうせ暇なんでしょ？この美女の過去話くらい聞いてやってよ。」と、細い脚を可憐に組んだ。

女慣れしていないせいか、わたしはその仕草にドキリとしてしまう。
アヤは咳払いをして、もう一度言いかけた言葉を言いなおす。
「あたしはね、全部取り上げられたのよ。酷いと思うでしょ？」

話は3時間にも及んだ――
アヤが自分の部屋に帰ってから、私の頭には若い頃のアヤカと、その光景が浮かぶ。

「――私のおかあさん。おかあさんはとってもきれいです。お料理も上手で、私はおかあさんが作ってくれる、オムライスが大好きです。私は大きくなったら、おかあさんみたいな、きれいで優しい人になりたいです！」
パチパチパチパチ・・・
拍手喝采の中、娘は私に真っ直ぐ微笑んだ。
私も娘に向かって微笑み、小さく拍手を送る。
私の最愛の娘、マリ・・・。

≪そして≫（後書き）

次話は　９／２４　までに公開します！！

３章に入りました。今後ともお願いします＾＾

お気に入り一件！！（＜＿＞）ありがとうございまーーっす！！

たいへん嬉しいですぅぅぅ♪

あたしの幸せ（前書き）

この小説には、教育上良くない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

あたしの幸せ

夕暮れ、帰り道。
春の空気が暖かいが、風が吹くとまだ少しだけ肌寒い。
この子の手はまだ小さいけれど、温かさは大人と同じくらい並みに放っている。
「今日、マリは頑張ったから、夜ご飯はうんと美味しいものを作らないとね。」
「ハンバーグがいい！！」
「よし！じゃあ、ハンバーグにしよっか。一緒に手伝ってくれる？」
「はーーーい！！」
あたしはこの幸せを噛みしめている。
今日は、ハンバーグか、そうだ、チーズも乗せよう。
そういえばマリはまだチーズを食べた事がないけど、きっと喜ぶだろう。
そろそろ夫が帰って来る時間だ。
「さあ、パパが待ってるかな？」
「早く帰らなきゃ！」
あたしの口癖を真似るマリ。
あたしが、夫が帰るときには、迎えてあげなければと思っているのだ。
それをいつからか汲み取ったマリが、いつか大きくなっても、この心掛けは大切にしてほしいな、と少し願う。
この子も大きくなって、夢を見るのだ。
好きな人が出来て、恋をして、恋人になって・・・
ただ一つ思うのが、あたしのような生き方はしてほしくないという事。
大学受験に失敗し、高校を中退した後、する事がないあたしは結婚

に逃げた。
そうしたかった？
ううん、そうするしかなかった。
親や姉はあたしと違って、大きな大学を出てる。
「持った友達が悪かったな」と笑う両親は、きっとどこかが狂ってる。
「また髪染めて、人生ダメにしちゃうよ？」何かあたしの変化を見つけると、人生を語らう姉が嫌いだった。
逃げの人生を選んだあたしは、すぐにマリが生まれ、必死で母親になろうと努力した。
やっと落ち着いた今が、どれだけ幸せな事か、計り知れない。

我が家のマンションに着いた頃には、夕日が煮玉子の黄身のように真っ赤だった。
マンションから見える最寄りの駅には、よく見る電車が止まっている。
「急がなきゃ！」
小さいながらに一生懸命、あたしの手を引くマリは、微笑ましいほどにたくましい。
あの電車に夫が乗っている事を、マリもあたしも知っている。
急いで部屋に駆け込み、マリの着替えが終わったところで、インターホンが鳴った。
あたしとマリと顔を見合って微笑む。
マリが玄関の扉を開ける様子を、あたしはキッチンから身を乗り出して見守る。
慎重ほどある扉を精いっぱいに背伸びしているマリが、また大きくなったように思う。
ガチャンと音がしてから「ただいま～」と聞きなれた声が聞こえた。
夫とは3年の交際を経て、7年前に結婚。
娘は今年で小学校に上がったばかり。

夫の仕事は安定しており、あたしは専属主婦をこなしている。
娘と夫とあたしの3人・・・・いや。
「パパ、マリ、実はね・・・・」
「どうしたんだ？なんだか、嬉しそうじゃないか。」
「家族がもう一人増えるのよ。」
今日、マリが学校に行っている間に産婦人科へ診てもらうと、あたしのお腹に小さな命が宿っていたのだ。
夫は「そうか、そうか」と何度もうなずいていた。
マリも「マリ、お姉さんになるの？」と、不思議そうに顔を傾けて、あたしを見上げる。
この幸せは、あたしにはもったいない。
あたしなんかには、もったいない。
あたしはこの幸せが長続きしてほしいと願っていたのに、あの日、神様はまるで過去のあたしを責めるように、この幸せは消され、呆気も無くあたしをダメにした――

あたしの幸せ（後書き）

ギリギリすみません＞＜

１０／１　までに公開しますので、よろしくお願いします！！

頑張るでぇ～！！！

9話（前書き）

この小説には、教育上よくない言葉が含まれています。ご了承ください。m（＿）m

9話

目を開けて時計を確認すると、時刻は『ＡＭ６：００』となっていた。
知らぬ間に眠ってしまったようで、首が痛い。
ふと耳に華やかな笑い声が入って来た。
リビングの方では人が集まっているようだ。
重い体を引きずるようにしてリビングへ向かうと、視界にリオの姿が飛び込んできた。
車いすに座ったリオを取り囲んで、メイコ、アヤカ、ラウルがきゃっきゃと騒ぎ立てている。
リビングの入口に立っている私に気付いたのはメイコだった。
やはり、メイコは勘が鋭い。
メイコを見るのは実に久しぶりだ。
「おはよう」
人の間から顔を出したリオは、血色のよい顔になっている。
「こいつが噂のユキワラだ。」
アヤカが強引に手を引いてリオの前に突き出した。
「あ、あの・・・あの時はありがとうございました。」
「いえいえ、体調は？」
「おかげさまで。」
リオはとても穏やかな人なんだと、この時知った。
血色が悪く一週間も眠り続けたリオは、まるで剥製にしたゾンビのように恐ろしい印象だったのだから。
そこへドタドタと大きな巨体が入って来る。
「おう、リオ、もういいのかい？」
「はい、あと少しで仕事の方にも復帰できそうです。」
「それは助かる。」

大きな巨体――シゲは、咳払いをしてから「お楽しみのところ悪いが仕事の話だ。」と言う。
暗黙の了解でラウルがリオの車いすを押して医務室に戻って行くのを見計らい、シゲは本題を切り出す。
「リョウヘイが居なくなった。今朝のことだ。」
「リョウヘイが！？」
私とアヤカが叫ぶ。
なんだか血の気が引いていくのが分かった。
「ああ。どうやらあいつの親父が関係していると見た。この一週間、メイコとシャックと俺とで色々調べたんだが、幾度か街へ出かけていたんだ。もしもあいつが親父さんを手に掛けたら、えらいことになるはずだ・・・。その手をどうしても止めたい。協力してくれ。」
固唾を飲んだのは私だけじゃなかったようだ。
アヤカも顔をこわばらせて、口元をわなわなと震わせている。
「リョウヘイはお父さんを憎んでいるのです。有り得ない事でも無いです。」
メイコが強い口調で言い、私達を睨むように見ていた。
「方法は？」
アヤカが訊くと、シゲは懐からポケットサイズの地図を取り出した。
机の上に広げると、ある所を指で示す。
「ここへ行く。」

9話（後書き）

久しぶりの更新になってしまいました＞＜
進学の事でごたついていたので・・・
１０／２０までに更新したいと思います！！！
いつも御観覧、感謝しております＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8253v/

アンダーロード

2011年10月13日15時56分発行